

岡山大学文学部紀要,
54, 37-53. (2010年)

「文化」をめぐる行動随伴性 (1)
～ペン選択実験をめぐる議論と展望～

長谷川 芳典

「文化」をめぐる行動随伴性 (1)
～ペン選択実験をめぐる議論と展望～

長谷川 芳典

本稿の目的は、文化心理学関連領域における議論に行動分析学の知見、特にその中心をなす行動随伴性の概念を生かすことにある。このことによって、「文化」をめぐる実験研究や調査研究の成果を見直し、論点を整理し、新たな「行動文化論」を構築することをめざす。

行動分析学が文化をどう捉えているのかについては、前編にあたる、

●長谷川 (2010). スキナー以後の心理学(20)文化と心理学.

で、行動分析学の創始者であるスキナーの考え方 (Skinner, 1953, 981) や、グレン (Sigrid S. Glenn) による一連の議論 (Glenn, 2003, 2004ほか) に言及したところであるが、紙数の制約上、具体的な現象についてまで触れることはできなかった。

また、心理学の他領域との接点を探る目的で、最近刊行された

●石黒・亀田 (2010). 文化と実践 心の本質的社会性を問う.

の中の記述の一部にコメントを加えたが、これまた、紙数の制約上から、

・第1章の山岸 (2010) には、行動分析学における「行動随伴性」概念に酷似する考え方が含まれている。

・第2章の石井 (2010) において行動主義に対する著しい無知と誤解がある。

という2点を指摘するにとどまらざるを得なかった。

そこで、本稿及びその続編では、文化心理学関連領域でしばしば言及されている実験・調査研究をいくつか取り上げ、具体的な内容に即して議論を深めていくことにしたい。

長谷川 (2010) で指摘したように、文化心理学やその関連領域の専門書、論文の中では、行動分析学あるいは徹底的行動主義についての知見は全くと言ってよいほど考慮されていない、もしくは、前述の石井 (2010) のように著しく誤解されたままになっている。本稿および続編において具体的な内容に言及することは、行動分析学の視点の有用性についての理解を広げ、論点を別の角度から見直し、より建設的な方向に研究を進める上で大いに意義があるのではないかと考える次第である。

今回はその1回目として、「ペン選択」に関する議論を取り上げる。ここでいう「ペン選択実験」とは、一口で言えば、

5本のボールペンが提示されそのうちの1本を貰えるという時にどれを選ぶか

というフィールド実験である。ボールペンのインクはいずれも黒であるが、外側の筒の色が2通りに異なっている。提示本数の5は奇数なので、当然その内訳は4:1、または3:2のい

ずれかとなる。以下、特に断らない限り、このうち数の多いほうの色を「多数色」、少ない方を「少数色」と呼ぶ^{*1}。注目点は、欧米人と東アジア人で、多数色と少数色のいずれかを選択する傾向に違いがあるのかということである。そしてこの実験研究の結果は、文化心理学の領域では、欧米人に一般的とされる「相互独立的自己観」と東アジア人に一般的とされる「相互協調的自己観」を反映するものとしてしばしば議論されてきた。

しかし、長谷川(2010)で指摘したように、それらの議論の中では、行動分析学の知見は全く反映されていない。考慮に値しないとして意図的に排除しているのか、研究領域が細分化されてしまったために行動分析学の知見が情報として伝わっていなかったのかは不明であるが、とにかく以下で論じるように、行動分析学の視点を考慮に入れることは不可欠ではないかと私は考える。

本稿では以下の2つの論文で報告されている3つの実験・調査研究を中心に取り上げる。

- Kim & Markus (1999). の第3研究：空港で謝礼として5本のペンを提示するフィールド実験。
 - Yamagishi, Hashimoto, & Schu (2008) の第1研究：5本の中から1本を選ぶという場面を想定した質問紙調査と印象評定。
 - Yamagishi, Hashimoto, & Schu (2008) の第2研究：実験参加の謝礼として5本の中から1本選ばせるという実験。提示の時期や、参加してもらった実験の内容などによる条件比較。
- なお本稿で特にことわりなく「今回取り上げた3研究」呼ぶ場合は、上記3研究のことをさすものとする。

1. 3つの研究の詳細

まず、議論を正確に行う必要があるため、以下、3つの研究の方法と結果をより細かく要約・引用する。

1. 1. Kim & Markus (1999). の第3研究

このフィールド実験の方法と結果は以下のとおりであった。

- ・場所はサンフランシスコ国際空港の待合所等。
- ・実験参加者は欧米系アメリカ人27人(男15女12、平均年齢34.68歳)と東アジア人29人(男17女12、中国人13、韓国人16、平均年齢30.32歳)。同行者なし。
- ・実験材料は、日本製のノック式ボールペンで、1本85セント。インクの色はすべて黒。外側の色(円筒部分の色)はオレンジ色、もしくはライトグリーン。事前の調査によれば、これらの色に対する好みは同程度である。
- ・調査員は実験の仮説について知らされていない。
- ・調査員はまず、参加者にアンケートに回答すると謝礼にボールペンが貰えるということを告

げ、承諾した人に対してアンケート用紙(質問は8項目)を渡す。

- ・調査員のバッグには、外側の色が2通りに異なるボールペンが同数入れられており、そこからできるだけ自然な振る舞いで5本を取り出し、参加者にこのうちの1本を受け取らせる。取り出した5本がすべて同じ色だった場合に限り、そのうちの1本をバッグに落とし込んで異なる色の1本と取り替える。但し、バッグには多数のペンが入れられており、5本とも同じ色になることはきわめて稀であった。

実験参加者に対して5本のボールペンが提示され、かつ少なくとも1本は異なる色であるという条件から、2種類の色の比率は4:1もしくは3:2となることが論理的に必然であった。

実験の結果、4:1の比率条件で、少数色(色が異なる1本)を選んだ参加者は、欧米系アメリカ人では77%、東アジア人は31%、また、3:2の比率条件で、少数色(2本だけ同じ色)を選んだ欧米系アメリカ人は71%、東アジア人は15%となり、欧米系アメリカ人のほうが少数色を好むこと、またその傾向は、色自体の特性(オレンジ色とライトグリーンの好みの差)ではないことなどが統計的に確認された。

1. 2. 山岸らによるシナリオ実験

キムらのフィールド実験を別の枠組みで捉えるため、Yamagishi, Hashimoto, & Schug (2008) は以下のようなシナリオ実験を行った。但しそれらは、Kim, & Markus (1999) のようなフィールド実験ではなく、「こういう状況であなたはどうか」といった想定に基づく質問調査、あるいは「こういうことをした人についてどう思うか」といった印象評定から構成されるものであった。原典に基づいて要約すると以下のようなになる^{*2}。

・アメリカ人参加者51名(ミシガン大学生、男14、女37)。日本人参加者55名(北海道大学生、男27、女28)

・参加者は以下の4つのシナリオと印象評定に順番に回答する。

- (1) 「ある質問紙に答え、その謝礼としてペンが提供される」というシナリオを読んで貰い、多数色と少数色が4:1となっている5本のペンのうち、自分ならどれを選ぶか。なお、質問紙では「多数色をゼッタイ(definitely)選ぶ」、「多数色をたぶん(probably)」、「少数色をたぶん(probably)選ぶ」、「少数色をゼッタイ(definitely)選ぶ」という4件法の回答となっていたが^{*3}、オリジナルの論文やそれを要約紹介した山岸(2010)では、「ゼッタイ」と「たぶん」を合算した比率で考察されている。
- (2) シナリオ中の登場人物は5人の中で最初にペンを選ぶ人であると想定。

*2 (5)の印象評価予想についての記述は、山岸(2010)に基づく。

*3 英語で書かれた論文であるため、日本人参加者に対して、「definitely」、「probably」に対応するどのような日本語表現が用いられたのかは不明。ここでの「ゼッタイ」、「たぶん」は長谷川の暫定訳であることをお断りしておく。

この種の、質問紙による「文化」研究では、異なる言語で調査が行われるため、それぞれの言語で用いられる形容詞や副詞の微妙なニュアンスの差が結果に影響を及ぼすことは避けがたい。但し「ゼッタイ」と「たぶん」にニュアンスの差があっても、両者の比率を合算すれば、「選ぶ」か「選ばないか」の2者択一と同義となり、言語によるニュアンスの差は出にくくなると考えられる。

*1 具体的にどの色を選んだのかということは無視して、とにかく数の多いほうを多数色、少ない方を少数色と呼ぶ。以下すべて同様。

(3) シナリオ中の登場人物がペンを選ぶ順番は、他の人がすべて選択を済ませた後 (=最後) であったと想定。

(4) 文房具店で4:1の中から購入する(他者に気兼ねする必要なし)

(5) 最初のデフォルトシナリオで、少数色を選択した者と多数色を選択した者に対して、他者一般がどの程度好ましいと評価するかを9点尺度で予想。

以上の質問調査の結果は以下の通りであった。なお(1)~(5)は上記の各シナリオ記述の番号に一つ一つ対応している*4。

(1) 少数色を選択すると答えた参加者の比率は、アメリカ人71%*5、日本人53%で有意差あり。

(2) このシナリオにより、少数色を選択する比率は上記(1)の結果と比べて、アメリカ人で71%から49%に減少、日本人で53%から45%に減少した。日米間の有意差無し。

(3) 少数色選択比率は、アメリカ人72%、日本人71%で、日米間の有意差無し。

(4) 少数色選択比率は、アメリカ人で76%、日本人で73%。

(5) 多数色選択者を他者一般がどう評価するかについての予想平均値は、アメリカ人では6.63、日本人では7.09。同じく少数色選択者への評価の予想平均値は、アメリカ人では4.80、日本人では4.11。

(6) このほか性差なども見られているが本稿では議論しない。

1. 3. 山岸らによる現実場面での実験

上記1. 2. のシナリオ実験は場面を想定したものであり、また、多数色と少数色のどちらを選ぶかという判断やそのことの影響評価を迫るものであった。このことのアーティファクトを取り除くため、Yamagishi, et al. (2008) の第2研究ではさらに次のような実験が行われた。

(1) 北海道大学社会心理学実験室の様々な実験の参加者に謝礼としてペンを贈呈する。

(2) ペンはコップの中に5本入っており、うち1本のみ外側の色が異なる。具体的な色は被験者によりカウンターバランス。

(3) ペンは実験中に使うが、そのまま持って帰ってよいという設定。さらに、ペンを実験開始前に選ぶ条件(106名)と終了後に選ぶ条件(548名)に分かれる。

(4) 実験開始前にペンを選ぶ条件はさらに、実験者の目の前でペンを選ぶ「実験者条件」(41名)と、実験者が実験室から立ち去った後でペンを選ぶ「実験者不在条件」(65名)に分かれる。

(5) 実験終了後にペンを選ぶ条件も、実験者の目の前でペンを選ぶ「実験者条件」(248名)と、実験者が実験室から立ち去った後でペンを選ぶ「実験者不在条件」(406名)に分かれる。さらに参加した実験の内容により、

*4 原著論文(Yamagishi, et al. 2008)及びそれを引用した山岸(2010)では、多数色を選択した比率と、少数色を選択した比率の両方が混在していたが、本稿では、すべて少数色比率に統一した。少数色選択比率が記されていないデータについては、長谷川が原著論文の表や記述を元に、「1マイナス多数色選択比率」として計算した。以下同様。

*5 原著では70%と記されていたが、山岸(2010)では71%となっていた。

・他参加者との相互依存関係を前提として意志決定を行う「ゲーム実験」。「ゲーム実験」は、他参加者からの監視に晒される「監視ゲーム実験」と、監視が不可能な「匿名ゲーム実験」に分けられた。

・他者の存在を前提としない「非ゲーム実験」。

これらの分類により、実験後にペンを選ぶ条件は、実験者の有無2通り×直前の実験内容4通り=合計8通りとなる。各条件の被験者数は12名から146名まで不揃い。

(6) これとは別に、非ゲーム実験後の「実験者条件」のもとで、アメリカ人実験参加者にペン選択をさせる実験が行われた。

得られた結果は以下の通り*6。

まず、実験開始前の2条件では、少数色を選んだ比率は、実験者条件が23%、実験者不在条件が52%。要するに見られていない条件のほうが見られている条件よりも少数色を選んだ。

次に、実験終了後にペンを受け取る3条件で少数色を選んだ比率は、

・実験者条件では、非ゲーム実験群が34.9%、匿名ゲーム実験群が34.9%、監視ゲーム実験群では19.1%

・実験者不在群では、非ゲーム実験群が57.1%、匿名ゲーム実験群が58.6%、監視ゲーム実験群では16.7%

というように、他者が影響を与える実験を経験した直後では少数色を選ぶ比率が低くなった。

また、上記(6)のアメリカ人実験参加者(非ゲーム実験後の実験者条件)では、少数色選択の比率が63%であり、日本人参加者の34.9%を大幅に上回った。

2. 山岸(2010)による議論

以上の3つの研究をふまえて、山岸(2010)は以下のような議論を行っている。なお以下はすべて長谷川による要約であり、部分的な省略、表現の補足、文体変更などの改変が行われていることをお断りしておく。

2. 1. 北山、マーカス、キムらの文化心理学の特徴

・欧米人の間では相互独立的自己観、すなわち、人は他の主体とは独立に、内的に駆動されて行動する主体であるという信念が共有されている。東アジアの間では、相互協調的自己観、すなわち、個々の人間は大きなシステムの一要素であり、自分の内的状態や行動をシステムの状態に適合するように行動するという信念が共有されている。

・ある文化において正しいもの、良いものとされているものは何でも、その文化の人々が好むようになる。

*6 この実験でも、多数色を選択した比率と、少数色を選択した比率の両方が混在していたので、本稿では、すべて少数色比率に統一した。少数色選択比率が記されていないデータについては、長谷川が原著論文の表や記述を元に、「1マイナス多数色選択比率」として計算した。

・人間はそれぞれに特有の欲望や理想や感情に駆動されて行動する独立した主体であるという一般概念を共有している欧米人は、それゆえに、他人とは違うユニークなものへの選好を持つようになる。これに対して東アジア人は、一人ひとりの個人は全体の一要素であるという信念を共有しているために、他人の期待や行動への同調を好むようになる。

2. 2. 山岸の「制度的アプローチ」

- (1) 「文化への制度的アプローチ」という新たな枠組みを提唱する。制度的アプローチの最も重要な概念は「誘因=インセンティブ」であり、もっとも重要な考え方は「心は行動を導くための道具であり、行動は結果を伴う」制度的アプローチでは行動の結果を「誘因」として理解することで、誘因と信念の自己制御システムとして文化を分析する。
- (2) 文化への制度アプローチの中心的アイデアはニッチ構築である。ニッチ構築とは、生物が自分たち自身の行動によって適応環境を構築することである【17~18頁】。
- (3) 「制度」とは、人々が集散的に維持している反応のパターン。人はゲーム・プレーヤーであり、個人は、自分の行動が他の人々からどのような反応を引き起こすかを予想し、その予想した他者の反応が自分にとって望ましい結果をもたらすかどうかを判断して行動している。
- (4) 人間は制度に適応した行動をとることで、自分たちが適応すべき制度を生み出している【19頁】。個人主義的「文化」や集団主義的「文化」という表現は妥当ではなく、個人主義的社会、集団主義的社会とすべきである。人々が直面しているのは自分の行動が生み出す他者の反応パターンとしての制度であり、個々人が持っている選好ではないからである【28頁】。

2. 3. 3つの研究についての山岸の解釈

- (1) 山岸らの2つの研究によれば、日本人参加者でも、自分の選択が他者に影響を与えず、選び方によって他者から悪く思われるような状況に無い時は、少数色ペンを選ぶ傾向が高い。もし、多数色への好み日本人にビルトインされていたのであれば、状況や文脈の影響は受けずに一貫して多数色を好むはずであろう*7。また、部分的に比較されたアメリカ人参加者の場合でも、「登場人物は5人の中で最初に選ぶ人である」といったシナリオのもとでは少数色を選ぶ比率が71%から49%に減少した。
- (2) Kim & Markus (1999) の実験では、自分が直面していた文脈の意味が曖昧であった。欧

*7 このことに関しては北山 (2010) は、キムらの研究では、独自の刺激と一般的な刺激への好みも調べており選択行動と同様の結果が報告されているので山岸の批判には対応できている、と反論している (234-235頁)。じっさい、Kim & Markus (1999) の第1研究と第2研究では、1枚に描かれた9個の幾何学図形それぞれに対する好き嫌いを9段階で評定するという質問調査が行われている。図形は2種類からなり、うち1個ないし2~4個の少数派と、残りの多数派図形から構成されていた。その結果、欧米系アメリカ人に比べて中国系アメリカ人や韓国人は、少数派図形への好みが高いことが示されている。しかし、研究1と研究2は、少数派図形と多数派図形への好みを明示的に選択させる質問紙であった。国際空港におけるペン選択とは全く状況が異なっており、幾何学図形に関するデータが山岸 (2010) の批判に十分に耐えうる証拠になりうるかどうかについては、さらに議論が必要である。

米系アメリカ人の少数色選択比率が高かった理由は、山岸のシナリオ実験の結果から明確になる。すなわち、当初の状況を東アジア人 (但し、山岸の実験では日本人) は、自分の行動が他人から監視されている最初の選択者であると理解していたため、他者に気兼ねすることで少数色を選ぶ比率が抑えられた。いっぽうアメリカ人は、同じ場面を、自分が最後の選択者であったり、文房具屋でペンを購入する場面と同じように理解したため、少数色を選択する比率が高くなった。元のKim & Markus (1999) の実験の差は「状況をどう理解したのか」の違いを反映したものである。より明確で具体的な状況では、アメリカ人であっても他人から悪く思われることを避ける戦略 (「Not-Offend-Others Strategy」、以下NOSと略す) をとりうる。(アメリカ人でも、鍋に残った最後の一切れを取るかどうかという場面では、日本人同様にNOSを用いる。)

3. 3つの研究についてのいくつかの基本的な疑問

以上に紹介した3つの研究に関する議論をする前に、それ前の基本的な段階として、サンプリング、比率の差をめぐる解釈などについて、いくつかの問題点、疑問点を掲げておく。

3. 1. サンプリングに関する疑問

まず、Kim & Markus (1999) の実験では、

- (1) 欧米系アメリカ人のグループのほうが平均年齢が4歳ほど異なっている。年齢差が反映した可能性はないか？
- (2) 東アジア人のグループのほうが男性の比率が若干高い。性差が影響を及ぼした可能性はないか？
- (3) 2つのグループの間では (出国か帰国か、観光か留学かビジネスかなど) 旅行目的の違いがある可能性があり、母集団として想定されている欧米系アメリカ人と東アジア人の代表になりうるだろうか。

といった疑問が残る。

Yamagishi, et al. (2008) のシナリオ実験についても、ミシガン大学生と北海道大学生だけで日米の文化差が比較検討できるかというサンプリングの問題が残る。これはYamagishi, et al. (2008) の実験室場面での謝礼実験についても同様である。

これらの研究のみならず、一般に文化心理学の領域で行われる実験や調査では、研究者の勤務先 (もしくは縁のある) 大学の学生が日本人やアメリカ人の「代表」として「サンプリング」されることが多いように見受けられる。例えば、北山 (2010, p228-236) では、「本州人」と「北海道人」と「アメリカ人」の原因判断や、反実仮想判断における内的あるいは外的原因への評定の差に関して、

- ・北海道にフロンティア・独立的文化が根づいている可能性。
- ・「北海道人」には独立的特製と協調的特製を使い分けているといった「バイカルチャル」の特徴がある。
- ・「北海道人」を対象にして行われた山岸の研究が本州でも追試できるかどうか興味ぶかい。

といった議論を詳細に展開しているが、引用元のKitayama, Ishii, Imada, & Takemura (2006)の調査で「北海道人」とされたのは北海道大学学生、「本州人」は京都大学学生、「アメリカ人」はミシガン大学とシカゴ大学の学生であった。素朴に考えても北大生と京大生には(北海道と本州という地域ではない)大学独自の特性があるはずで、補完的なデータでいくら大丈夫だと言ったところで、彼らを代表として「本州人」、「北海道人」、「アメリカ人」の一般的特性を議論するのはあまりにも飛躍がありすぎると思えてならない*8。

北山(2010, 235-236頁)では「実証研究」の面白さや意義を説かれているが、勤務先の大学、あるいは担当授業の受講生だけからであれば、いくらたくさんのデータを集めても母集団の比較にはなりえないであろう。

3. 2. 「多数色への好み」についての疑問

1本だけ(外装の)色が異なる5本のペンが示され、「お好きなペンを1本だけ選んでください」と言われた時、人はどのような行動をするだろうか。上掲の3つの研究からは、日本人(あるいは東アジア人)は、他者から見られているような状況では多数色(同じ色4本のいずれか)を選ぶ傾向が強いように見える。

しかしそのことを事実認定をする前に、色の違いを気にせず、無作為に1本を選んだという可能性についても考慮する必要があるように思う。

Kim & Markus (1999)の実験に具体的に当てはめれば、

- ・5本のボールペンの色に無頓着な場合、あるいは目をつぶってランダムに選ぶ場合、多数色が選ばれる確率は4/5 (=80%) または3/5 (60%) となる。よって、東アジア人が多数色を選んだという結果は、ことさらに多数色を選んだのではなく、色の違いはどうでもよく、たまたま手にしたペンが多数色であったのではないか?

という可能性である。

じつはこのことに関しては、Kim & Markus (1999, 791頁)でもいちおう考察されている。反論のロジックを要約(長谷川による改変、補足あり)すると、

- ・参加者全員が色に無頓着であったとすると、少数色を選ぶ確率は、少数色ペンが5本中2本である場合には40%、5本中1本である場合には20%となるはずである。
- ・しかし東アジア人の選択比率は、実際には、5本中2本の条件では15%、5本中1本の条件では31%となっていて、期待値には一致しないし、5本中1本のほうが高くなっている。
- ・よって東アジア人がランダムにペンを選んだのではないかという説明は、文化の影響があっ

たという説明よりも可能性が低いように思われる。

確かに、参加者全員がことごとく色を無視したとすれば、期待値に一致する選択比率になるはずであり、実際のデータはそうっていない。よって、「全員が色を無視したという可能性はない」と主張することはできる。しかし、一部の東アジア人が色を無視し、残りが色を気にしたという可能性は、このデータからは必ずしも否定されない。

また、5本中1本を選ぶという条件で、実際に少数色を選んだ比率は31%となっており、ランダムに選ばれる確率20%よりも高かった。よって、この条件のもとでは東アジア人は、原典の「多数色を好んだ」ではなくて、むしろ偶然レベルに比べて少数色を好んでいたと結論することも可能であろう。

次に、Yamagishi, et al. (2008)の実験室場面での謝礼贈呈実験では、ランダムにペンを選んだ場合、少数色が選ばれる確率は20%であった。よって、少数色を選んだ比率が20%前後(この実験で言えば、実験開始前+実験者条件で23%、監視ゲーム群で実験終了後に選択した場合の16~19%前後など)の場合、少数色を積極的に選んだという証拠にはならないことを指摘しておきたい。

もう1つの、Yamagishi, et al. (2008)のシナリオ実験の場合は、多数色と少数色のどちらを選ぶかについて明確な意思表示を迫っている。要するに「色に無頓着で選んではイケナイ、どちらを選ぶのかは印象評価にも影響するきわめて重大な選択である」という暗黙のプレッシャーが含まれているように思う。よって、選択傾向が似ていたというだけでは、Kim & Markus (1999)のフィールド実験の再現とは言い難い面がある。

3. 3. 色を無視したとした場合の代替の説明

では、実際問題として、「色に無頓着に選ぶ」という行動はどの程度起こりうるだろうか。これには、「どうでもいいから」説と、「品定めをすると悪印象を与える」説の2つが考えられる。但し前者は周囲に無頓着な行動、後者は周囲を気にする行動を前提としており、同じ人が両方の行動をとることはない。また、以下は、Kim & Markus (1999)やYamagishi, et al. (2008)などの主張内容には依拠せず、「何かを選ぶ時に、周りに影響されることがあるかもしれないし、無いかもしれない」という一般論として議論するものである。

「どうでもいいから」説

- Kim & Markus (1999)の実験は国際空港でペンを選ぶという場面であった。しかし
- ・たかが調査の御礼として渡される85セントのボールペンを選ぶのに、色の違いまで気にするだろうか?
 - ・選んで受け取る瞬間ではなく、受け取った後に長期間使用する場面こそが社会的影響を受けやすいのではないか。少なくとも一部の人は、ペンが提示された場面ではなく、その後に使用する場面を想定して選択をするはずだ。
 - ・調査員は多数のボールペンの入ったバッグから無造作に5本を取り出したとされている。残りのペンについてどちらが多数でどちらが少数であるのかは不明。要するに参加者は資源全体について、どちらの色が多数、少数であるか判断できない。そんななかでたまたま示され

* 8 2010年9月220~22日に開催された日本心理学会第74回大会の招待講演の1つ、彭凱平氏による、*Naive Dialecticism and its Psychological Consequences: A Decade of Empirical Study*. 素朴弁証法と心理学的成果—この10年間の実証的研究—という講演についても同じことが言える。引用された研究の中には、中国人とアメリカ人と日本人を比較した調査結果があった。講演全体としては大いに意義深いものであったが、データそのものは、北京大学学生(中国人)とカリフォルニア大学バークレイ校学生(米国人)と東京大学生(日本人)の比較であった。質問紙を通して明らかにされた各大学生の自己観や矛盾許容の質が、中国人、米国人、日本人を代表するものであるのかどうかはかなり疑問が残った。

た5本に関して、多い方とか少ない方を考慮して選ばなければならない必然性があるだろうか。

・仮に周りの目を気にする人が居たとしても、しよせん調査員(ペンをくれる人)は通りすがりのタダの他人に過ぎない。「恥はかきすて」の言葉もあるように、そもそも何の縁もなく、これから付き合う可能性が全く無い相手にどういう印象を与えるのかはいつでもいいことではないか。

といった素朴な考えが浮かぶ。もちろん、参加者の中には色や多数・少数色を判断材料にしてペンを選んだという人も居たとは思われるが(だからこそ、条件によって、選択の比率に違いが出る)、その一方で、何割かの人が「色なんか気にしない」と無作為に選んだ可能性はゼロとは言い難いように思う。

「品定めをすると悪印象を与える」説

もう1つは、前者とは正反対で、周りを気にする場合に起こる可能性である。一般に、何かを貰うという場面では、品定めをするように5本を比較するのはそれ自体「ずうずうしい」、「卑しい」と思われることがある。

じっさい、この種の印象評価やプレッシャーはわれわれの日常生活でもよくあると思われる。例えば、大皿に並べられたスイカの切片から「お1つどうぞ」と言われた場合、どの切片が一番大きいかを見比べるようなことをすればそれ自体が卑しいと評価されるであろう。そのように見られないために、できるだけ素早く、ランダムに選ぶ行動をとることはありうると思われる。

もちろんこのような傾向は、日本人や東アジア人に多いかもしれない。とすると、他者から監視されているような場面では、日本人や東アジア人は、できるだけ素早く、無造作に、「どれでも結構です」という形でペンを選ぶであろう。その場合、多数色を選ぶ比率は、目をつぶって選ぶ確率に近くなる。

念のためお断りしておくが、多数色を能動的に選ぶということと、無造作に手にしたら結果的に多数色が選ばれていたということでは行動の原因がまるで違う。後者は、自身が主体的に選択する権利を放棄し「本来御礼など要らないけれども、そう言われるなら、せっかくだから貰っておきましょう。あっ、どれでもいいですよ。」という態度をとることであり、「あっ、1本貰えるのですか。ええとどれがいいかなあ。」と自己主張するよりも、美德として受けとめられるかもしれない。少なくとも日本ではその可能性がある。

3. 4. 個人の「好み」や「傾向」は多数決で決められるのか?

例えば、香川県人と岡山県人それぞれ100人に、うどんとラーメンのどちらが好きかと尋ねたとする。あくまで仮想だが、香川県人のうちの80人、岡山県人のうちの40人が「うどんが好きだ」と答え、残りは「ラーメンが好きだ」と答えたとする。この差はもちろん統計的に有意である。ここからどういう結論を導くことができるだろうか。

(1)「香川県人のほうが岡山県人よりもうどんが好き人が多い」:

この結論は、単に事実を記述しただけである。あくまで言語報告に基づくものであり、かつ

確率的な判断であるが、この結論に異議を唱える人はいないだろう。次に、

(2)「ラーメンを好む傾向は両県で同程度であるが、香川県人がうどんを好む傾向は岡山県人よりも強い。」

(3)「うどんを好む傾向は両県で同程度であるが、岡山県人がラーメンを好む傾向は香川県人よりも強い。」

(4)「香川県人はうどんを好む傾向が強く、岡山県人はラーメンを好む傾向が強い」

という3つの結論の可能性が考えられる。但し、「うどんとラーメンのどちらが好きか」という質問だけではいずれが真実であるかは断定できない。

そしてさらにもう1つ、

(5)世の中には「うどん人」と「ラーメン人」の2種類が存在する。香川県には「うどん人」が多く、岡山県には「ラーメン人」が多い。

という結論も可能ではある。

上述(2)~(4)の解釈では、我々は「こころの中」に、うどん好き、ラーメン好きという「性質」を備えているという暗黙の仮定がある。そして、その性質の程度は、平均値を中心に一定のパラッキで分布している。また、平均値の大きさはそれぞれの県の文化の影響により異なる。いっぽう(5)は、「うどん人」と「ラーメン人」という質的に相容れない2つのタイプを想定している。これらは質的な差違であって、好みの程度の平均値や分散のような量的差違は考慮する必要がない。

(2)から(4)の解釈をするか、それとも(5)のような捉え方をするのかは、人間を(心理的な)量的変数の束としてとらえるか、質的な類型として分類するのかという問題であり、得られたデータだけではどちらが正しいのか判断できない場合がある。どちらが正しいかというよりも、どちらの枠組みで現象をとらえたほうが、現象の予測や制御に有用であるかという問題であるとも言える。

例えば、日本人とデンマーク人を比較すると、デンマーク人のほうが明らかに背が高い。このケースでは、

・日本人男子100人とデンマーク人男子100人の平均身長はそれぞれ172.15cm、180.3cmであり、デンマーク人のほうが有意に身長が高かった。

というように、それぞれの集団において平均値が比較される。また個々の身長は、平均値の周りに一定のパラッキで分布すると考えられる。これは、日本人とデンマーク人で身長の高さを規定する遺伝的要因に違いがあり、そこに多種多様な後天的要因が作用して個々の身長を決定づけるという理論的根拠に基づく。

これに対して、

・A大学の女子学生と男子学生の比率は、文学部では8:2、工学部では1:9であった。

という場合はどうだろうか。この場合に、それぞれの学生の中に、「男性度」と「女性度」という要因があって文学部では「女性度」の平均値が高かったなどということはいえない。また文学部の男子学生の「女性度」は工学部よりも高く、工学部の女子学生の「男性度」が文学

部よりも高いなどというのは偏見に等しい。男性と女性という質的に異なる2者がそれぞれの学部に所属しており、当該データだけから言えるのは、比率に差があったということだけであろう。

今回の3つの研究のうち、Kim & Markus (1999) では、少数色や多数色への選択傾向は比較的固定的なものであって、それぞれの文化の中で獲得されていくと考えられている。山岸 (2010) では、そうした選択傾向は、シナリオに応じて柔軟に変更される戦略のようなものである。シナリオの情報が乏しい場合も、デフォルトの好みを反映するというよりは、デフォルトで採用されるシナリオ内容の違いを反映すると解釈されている。いずれの場合も選択傾向の差違は、平均値を中心として分散する変数の束として解釈可能ではあるが、質的な類型の差違としての解釈が完全に否定されたわけではない。

3. 5. 多数決でレッテルを貼ることの根本的な問題

前節の3. 4. の仮想事例；

・香川県人と岡山県人それぞれ100人に、うどんとラーメンのどちらが好きかと尋ねたとする。

香川県人のうちの80人、岡山県人のうちの40人が「うどんが好きだ」と答えた。

に話を戻そう。この仮想データからは「香川県人のほうが岡山県人よりも、うどんが好き人が多い」という結論を導くことはできるが、「あなたは香川県人だからうどんが好きだ。あなたは岡山県人だからラーメンが好きだ」などと、多数決によるステレオタイプなレッテル貼り個人で個人の行動傾向を決めつけることはできない。少数派は決して、母集団の平均値からの逸脱が大きい人たちだとは言えないし、例外扱いにするわけにはいかない。

しかし、文化心理学関連の研究では、しばしば、

・東アジア人は「相互協調的自己観」、欧米人は「相互独立的自己観」

・木を見る西洋人、森を見る東洋人^{*9}

・日本は高コンテクストの文化、アメリカは、低コンテクストの文化^{*10}

というような議論がなされているが、これらはいずれも、「〇〇人には××という傾向をもつ人が多い」という多数決論理に基づく推論にすぎない。

ある集団に影響を及ぼす変数が同定され、他集団と比較して平均値や構成比率に有意な差が認められた場合に結論できることは、その変数が「ある程度関与していた（影響を及ぼしていた）」ということだけである。それぞれの集団に属する個人や、少数派の行動を説明することはできない。

4. 行動分析学的アプローチ

4. 1. 「好み」を取り巻く随伴性

本稿で取り上げたペン選択実験の結果は、しばしば、「多数色（または少数色）を好んだ」

と解釈されている。じっさい、もとのKim & Markus (1999) では、「prefer（好む、選好する）」あるいはその名詞形の「好み、選好（preference）」という言葉が論文全体にわたり多用されている。また、Yamagishi et. al (2008). の論文のタイトルが

Preferences versus strategies as explanations for culture-specific behavior.

となっていることから分かるように、Kim & Markus (1999) の解釈は「好み」の違いであると位置づけた上で批判が展開されている。

しかし、行動分析学的な視点から言えば、「BよりもAをたくさん選んだ」という結果からは直ちには「Aを好んだ」という結論を出すわけにはいかない。

ここで3. 4. のうどんとラーメンの例をもういちど挙げてみよう。これら2つの麺が同時に出示された時にうどんを選んだ人は、特別の事情が無い限り^{*11}、「ラーメンよりもうどんが好きなんだ」と判断することができる。

いっぽう、トイレの入口に、「青でヒト形」と「赤でスカート」のマークがあった場合、男性利用者は「青でヒト形」が描かれた入口のほうを選ぶであろう^{*12}。この場合、男性は別段、「青でヒト形」を好んでいたわけではなく、単に、男性用トイレを弁別するための手がかりとして利用していたにすぎない。

行動分析学的に言えば、ある事象が「好まれる」ように見えるケースとしては、少なくとも3つのタイプがある。

(1) レスポンド行動における無条件刺激あるいは条件刺激：その事象が何らかの快反応を誘発する場合。例えば、性的な刺激が好まれるという場合は、その刺激は何らかの無条件反応（性的興奮）を誘発している。

(2) オペラント行動における好子：例えば、お手伝いをした後でラーメンを奢ってもらうことでお手伝いが強化されるのであれば、ラーメンは好まれていると判断される^{*13}。

(3) オペラント行動における弁別刺激：上述のトイレマークのような場合。

このうち(3)は見かけ上は「たくさん選んでいる」ように見えるが、実際には単なる手がかりであって、それ自体に何らかの価値や魅力があるわけではない。

元のペン選択実験に戻るが、例えば多数色を選んだという場合、多数色が好まれていたのか、それとも多数色というのは単なる弁別刺激に過ぎなかったのかは、選択比率だけからは判定できない。「多数色もしくは少数色ペンが好まれる」という説明が妥当であることを裏付けるには、単にどちらを選んだのかだけでなく、多数色（あるいは少数色）が快反応を誘発する条件

*11 前日まで毎日ラーメンばかり食べさせられていたような場合は、確立操作（=飽和化）により、一時的にラーメンを選ぶ傾向が下がるというような場合が、特別の事情にあたる。

*12 男女共同参画の視点から男女同一のトイレマークを採用している公共施設もあるが、分かりづらいう苦情も多いという。

*13 念のためお断りしておくが、ある事象が好子であると判断された場合は、その刺激はそれだけで言い尽くされており、改めて「好まれている」と言明する必要はない。それをたくさん選ぶのは、選ぶ行動が好子によって強化されていると考えれば充分であり、「好まれている」は、行動分析学・経には冗長な説明にすぎない。

*9 ニスベット著、村本訳 (2004) の書籍タイトル。

*10 Googleで「高コンテクスト 低コンテクスト 文化」を検索すると、73500件がヒット。

刺激になっていること、もしくは何らかの行動を強化する好子となっているという証拠を示す必要がある。さらには、その事象がどのような個人経験（条件づけ）を経て条件刺激や好子になったのかそのプロセスを示し、選択の直後にどのような形で強化あるいは弱化されているのかも確認しなければならない。いずれにせよ、多数色と少数色のいずれを選ぶかという状況は多種多様であり、特定の文化現象や自己観に一致するほど、一貫・固定的な現象であるとは考えにくいし、それらに依拠した説明は説得力を持たないように思われる。

ちなみに、日常生活における種々の経験的事実から見ると、固定的に「多数（あるいは少数）を好む」ということよりも、弁別刺激とし多数側（あるいは少数の側）を選んでいる事例が圧倒的に多い。多数側を選ぶ事例としては例えば、

- ・ラーメン博覧会で、行列の長いラーメン屋のところに並ぶ：行列の長いほうが人気があり、美味しいだろうというルール支配行動であると推測される。
- ・観光地で行き先が分からなくなった時、とりあえず、大勢の人の流れについていく：たくさんの人が向かう先には、名所があるだろうというルール支配行動であると推測される。いっぽう、少数側を選ぶ事例も考えられる。
- ・スーパーマーケットでは、できるだけ行列の少ないレジに並ぶ：行列の少ないほうに並んだほうが早く精算してもらえろということ、過去に何度も強化されたためと考えられる。
- ・量販店で、「お一人様1点限り」や「残りあと1個」という商品を選ぶ：在庫が少ないということから人気商品であるという弁別刺激になっている。「残りあと1個」は、今それを買わないと手に入らないという、好子消失阻止の随伴性と確立操作にもなっていると考えられる。
- ・絵葉書の陳列棚から、残りが1枚しかない商品を選ぶ：これも、在庫が少ないということから人気商品であるという弁別刺激になっていると考えられる。

以上の事例を説明するにあたっては、弁別刺激と強化の関係を述べれば充分であり、いちいち「相互独立的自己観」や「相互協調的自己観」を持ち出す必然性は見当たらない。

4. 2. 「戦略」を取り巻く随伴性

次に、Yamagishi et. al (2008) や山岸 (2010) の中で主張されているNOSについて検討してみよう。すでに述べたように、NOSは人から悪く思われることを避ける戦略である。山岸 (2010) によれば、5本のペンが与えられた時の行動傾向は以下のように説明される。

- ・東アジア人も欧米人も、同様に「ユニークなもの（ペン選択であれば少数色）」を好む傾向がある。但し、なぜそのような好みを持っているのかについては、ここでは議論の対象とはしない。
- ・特別な理由がない限り（＝デフォルトとして）、他人から悪く思われる可能性がある行動を避ける。
- ・ペンを貰う状況が曖昧である場合に、どの程度までNOSという戦略をとるかかどうかは、東アジア人と欧米人では異なっている。
- ・ペンを貰う状況が明確であって、少数色ペンを選ぶと自分に対する他者からの評価を低める

リスクが伴うような場合には、東アジア人も欧米人もNOS戦略をとる。よって多数色を選ぶ比率が高まる。欧米人でもすき焼きの最後の一切れには手を出さない。

行動分析学から見れば、山岸 (2010) が言うNOSは「こういう場面でこういう行動をとるとこういう結果が伴う」という随伴性を記述したルールである。この場合、実験参加者は、少数色を選ぶことで強化される一方、少数色を選ぶことにより他者からの評価が下がる（好子消失の随伴性による弱化）というルール支配行動により、少数色への選択を抑制する（弱化される）ようになる。このプロセスはすべて、強化、弱化、ルール支配行動という行動分析学的概念で十分に説明可能である。但し、

- ・なぜ少数色を選ぶことがデフォルトで強化されるのか
 - ・他者からの評価が下がるという弱化は本当に働いているのか
- については更なる検証が必要である。

もう1つ、Yamagishi et. al (2008) の第1研究について、他の側面があることを指摘しておきたい。この研究は、参加者に実際に選択をさせるのではなく、場面を想定し、いくつかのシナリオのもとでどういう行動をとるか（それらの行動をどの程度望ましいと思うか）について「definitely」、「probably」という形容詞つきで4件法で評定させるものであった。すでに指摘したように、このような評定が、現実の行動と同一であるかどうかは定かではない^{*14}。「色に無頓着で選んではイケナイ、どちらを選ぶのかは印象評価にも影響するきわめて重大な選択である」という誘導がなされた可能性もある。現実場面で実際に機能する弁別刺激と、仮想場面で言語的に明示されている「弁別刺激」は異なる働きをするに違いない。

4. 3. おわりに

行動分析学の創始者であるスキナーは、社会的な随伴性に関連して以下のように述べている。

- (1) 社会の慣習に従っている人の行動を社会的な環境の中で観察される随伴性によって説明するのは簡単である。問題は随伴性を説明することである。(Skinner, 1953, 訳書482頁)。
- (2) ...文化とはその中で生まれた人に影響を及ぼすその人以外の人々によって用意されたすべての変数のことである (Skinner, 1953, 訳書485頁)。
- (3) ...集団的あるいは文化的性格といった概念は、あらゆる類型論につきものの危険をすべてはらんでいる (Skinner, 1953, 訳書490頁)。
- (4) 確かに、ある集団がユニークな習慣によって特徴づけられるのなら、その集団はユニークな行動様式によっても特徴づけられるかもしれない。しかし、習慣と行動様式との因果的な結びつきは、実験科学に特有な条件下での関連変数の機能分析によって証明されなければならない (Skinner, 1953, 訳書491～492頁)。

などと論じている。

このうち(3)は、文化心理学にありがちな類型化、「〇〇人は××という傾向がある」への批

*14 質問紙調査における回答では、自分や自分が所属する回答者集団の評判が下がらないように、よく見せかけようとしたり、実際には行動しないにも関わらず模範的に回答するといったことがありうる。

判として肝に銘じておく必要がある。なお、文化心理学が民族間のステレオタイプを助長させるだけだという批判に対して、文化心理学の第一人者のお一人である北山 (2010) は、ご自身が提唱する「文化課題理論」に基づけばそのような批判の牙は折れてしまうのではないかと反論しておられるが、このことについての議論は、紙数の都合で本稿の続編以降に引き継ぐことにさせていただく。

最後にもう1つ、北山 (2010) は山岸 (2010) のゲーム論的分析への反論の中で、

一番の問題は、「どんな行動が結果的に得であるか」ということを「その行動が実際に維持されている」という事実とは独立に決定することは、一般的には不可能だという点にある。そのため、「維持されている行動には得な面を見つけることができる」としても、ここから「結果的に得になっている行動は維持されている」とは結論できないのである。

と述べている (226頁)。これは、山岸 (2010) の枠組みの中ではさらに検討を要する問題であるかもしれないが、「結果的に得」を「好子 (正の強化子) の随伴」、維持されているを「正の強化」というように置き換えてみれば、行動分析学における「強化の原理はなぜ循環論にならないか」という議論^{*15}に結びつけて疑問を解消することが可能である。行動分析学の世界ではこのような議論は何十年も前から行われてきたのに、そのことが山岸 (2010)、北山 (2010) の両論文で一度も引用されていないことはまことに残念でならない。

引用文献

- Glenn, S. S. (2003). Operant contingencies and the origin of cultures. In K.A.Lattel and P. N. Chase (Eds.) *Behavior theory and philosophy*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers. pp.223-242.
- Glenn, S. S. (2004). Individual behavior, culture, and social change. *The Behavior Analyst*, 27, 133-151.
- 長谷川芳典 (2010). スキナー以後の心理学 (20) 文化と心理学 岡山大学文学部紀要, 53, 33-45.
- 石黒広昭・亀田達也 (編) (2010). 文化と実践 心の本質的社会性を問う. 新曜社.
- 石井敬子 (2010). 文化と認知~文化心理学的アプローチ. [石黒広昭・亀田達也 (編). 文化と実践 心の本質的社会性を問う. 第2章 新曜社. pp.63-105.]
- Kim, G. . & Markus, H.R. (1999). Deviance or uniqueness, harmony or conformity? A cultural analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 785-800.
- 北山忍 (2010). 社会・行動科学のフロンティア-新たな開拓史にむけて-. [石黒広昭・亀田達也 (編). 文化と実践 心の本質的社会性を問う. 第6章 新曜社. pp.199-244.]
- Kitayama, S., Ishii, K., Imada, T., Takemura, K., & Ramaswamy, J. (2006). Voluntary settlement and the spirit of independence. Evidence from Japan's "Northern Frontier". *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 369-384.
- Skinner, B. F. (1953). *Science and human behavior*. New York: Macmillan. [河合伊六・長谷川芳典・高山敬・藤田維道・園田順一・平川忠敏・杉若弘子・藤本光孝・望月昭・大河内浩人・関口由香 (訳) (2003). *科学と人間行動*. 二瓶社.]
- Skinner, B. F. (1981). Selection by contingencies. *Science*, 213, 501-504. [Skinner (1987). Upon further reflection. (pp.51-63.) New Jersey: Prentice-Hall.に収録、岩本隆茂・佐藤香・長野幸治 [監訳] (1996). *人間と社会の省察*. 勁草書房.]
- Yamagishi, T., Hashimoto, H., & Schug, J. (2008). Preferences versus strategies as explanations for culture-specific behavior. *Psychological Science*, 19, 579-584.
- 山岸俊男 (2010). 文化への制度アプローチ. [石黒広昭・亀田達也 (編). 文化と実践 心の本質的社会性を問う. 第1章 新曜社. pp.15-62.]

*15 強化の原理が循環論にならない理由としては

- ・**場面間転移性**: ある事象が強化事象であるということを知ると、その事象が (同一個体または、同じ種の別の個体の) 別の行動の強化刺激にもなりうると予見できること。
 - ・**制御可能性**: ある事象が強化事象であるということを知ると、その事象を随伴させる確率 (強化率) や随伴のパターン (強化スケジュール) を操作することによって、行動の起こり方を制御することができること。
- の2つを挙げるができる。もちろん、これだけでは完全に解明できない矛盾現象も知られているが、行動の制御と予測を目ざす限りにおいてはこれで充分であろう。なお、行動分析学では、「得」とか「損」といった曖昧な概念は使われない。そのような概念を付け加えなくても、行動随伴性概念だけで十分に説明できるからである。